

相互行為による中学生のキャリア観の変容に関する 事例的研究

小林 篤史*・関戸 菜々子**・赤澤 佑輔***・竹元 玖乙***
福井 健一朗***・福坂 昂大***・西川 純****

(令和元年5月20日受付；令和元年11月29日受理)

要 旨

本研究では、中学1年生を対象に、総合的な学習の時間において生徒に自由な相互行為を保障するキャリア教育の授業実践を行い、その有効性を検証することを目的とした。その結果、生徒は自己の判断で調査・探究活動を進め、同じ活動班の生徒と関わり合うことで、キャリア観が高まることが明らかになった。特に「履歴書の作成」は、生徒のキャリア意識の向上に有効であることが明らかになった。

KEY WORDS

Career Education キャリア教育, Interaction 相互行為, Junior High School Student 中学生, Period for Integrated Study 総合的な学習の時間, Resume 履歴書

1 問題の所在

中央教育審議会(2011)は、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」とし¹⁾、中学校におけるキャリア教育推進のポイントを、「社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかり考えさせるとともに、目標を立てて計画的に取り組む態度を、体験を通じてその重要性について理解を深めさせつつ育成し、進路の選択・決定へと導くことが重要」としている²⁾。

しかし、中央教育審議会(2016)は、キャリア教育の現状の課題として、「職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものになっているのではないか」、「社会への接続を考慮せず、次の学校段階への進学のみを見据えた指導を行っているのではないか」、「職業を通じて未来の社会を創り上げていくという視点が乏しく、特定の既存組織のこれまでの在り方を前提に指導が行われているのではないか」等を指摘した³⁾。

さらに、これらの課題を乗り越えてキャリア教育を効果的に展開していくためには、「主体的・対話的で深い学び」を実現(アクティブ・ラーニングの視点)の必要性を述べている⁴⁾。

また、望月(2017)は「「キャリア教育」の「切り札」=「アクティブ・ラーニング」としている⁵⁾。

一方でキャリア教育の立場から、山口(2016)は、生徒が主体的・協働的に課題を発見・解決する力を身に付けられるようにするため、学校外の活動を重視し、アクティブ・ラーニングの手法を用い、地域の教育力を活用したキャリア教育の授業を設定・実践した。その結果、アンケート調査や生徒の振り返りの分析から、生徒のキャリア発達が促されることや生徒の自己肯定感が育成されることを明らかにした⁶⁾。

また松下ら(2016)は、正課外の時間において、希望者対象にタブレット端末を活用するデジタル・ストーリーテリング・ワークショップのキャリア教育実践を設定し、正解のない課題に対して生徒が協働して映像制作ワークショップに取り組むという実践を行った。実践後のアンケート調査結果からは、生徒が興味・関心を持ってこなかった可能性のある職業や仕事内容に対して、興味・関心を促すことができ、職業や仕事内容への理解を深めるきっかけになったことを報告している⁷⁾。

しかし、山口(2016)のキャリア教育実践は学校外の活動が主であり、学校内で日常的に行われる教育活動においての実践はない。また、松下ら(2016)の実践においては、希望対象生徒のみが参加しているため、キャリア教育実践の効果がどの生徒にも当てはまるとは言い難い。さらに、これらの実践において、情報提供は教師が行っているため、情報収集能力の育成や情報収集方法の選択の自由などの面で子どもの主体性に関して限界がある。具体的には「自己の判断で必要な情報の収集をする」のような面で制限がある。情報収集能力や思考力・判断力を育成するには、生徒

*大垣市立西小学校 **長野市立更北中学校 ***上越教育大学(専門職学位課程) ****学校教育学系

の主体性を損なわない実践が必要である。

山崎ら(2018)は生徒が「職業調査班」,「高校調査班」,「地元の偉人調査班」,「学校PR動画作成班」に分かれて活動するアクティブ・ラーニングの手法で行ったキャリア教育の授業においてボイスレコーダーとビデオを用い,生徒のキャリアに関する発言を抽出した。その結果,キャリアへの考えが変容した要因となる対話やその過程を明らかにした⁸⁾。

しかし,班の構成員を変えた場合の結果は明らかにされておらず,それぞれの班活動の効果の妥当性を検討するためには,班の構成員を変えた場合の調査が必要である。また,5時間分の短期的な調査であったため,「履歴書作成の活動」に関する分析がなされていなかった。このことから,中・長期的な調査を続けた場合の,アンケートや,プロトコル分析による会話量の変容など量的な分析に加え,履歴書の比較による質的な分析が必要である。

2 研究目的

中学校のキャリア教育の授業において,生徒のキャリアに関する考えが変容した要因となる対話やその過程を明らかにし,生徒に自由な相互行為を保障するキャリア教育の授業実践の有効性を検証することを目的とする。

3 研究方法

3.1 調査対象

新潟県公立中学校 第1学年

3.2 調査期間

平成29年12月～平成30年3月

キャリア教育の授業は,山崎(2018)に引き続き,総合的な学習の時間の授業において実施した。全12時間中の6～12時間目の6時間を本研究の調査対象とする。

3.3 調査対象授業

3.3.1 単元の目標

山崎(2018)に準拠し,表1の通りとする。

「表1 単元の目標」

	目標
ア	グループで進路資料(職業に関する資料,高校に関する資料)を作成することを通して,仲間と協力しながら課題を解決できる力を身に付ける。
イ	将来の設計図(履歴書)を作成することを通して,一人一人が今後の将来について見通せる力を身に付ける。
ウ	中学校PR資料を作成することを通して,自分たちの学校の良さに気づき,今後の学校生活を前向きに過ごそうとする気持ちを醸成する。
エ	先哲の考え方や資料等を手掛かりに,生き方について考えることを通して,自己の考え方を広げ,社会人としての資質を高めることができる。

この目標を達成するための単元全体の課題として,①学級全体でこれからの進路を決めるために使える進路資料を作成する,②進路資料(キャリア教育において作成したもの)を基に個人の履歴書を作成し,今後の将来設計を立てる,を設定した。①の活動を通して,仲間と協力し,課題を解決できる力や自らのキャリア意識を,②の活動を通して,キャリアプランニング能力や自己実現能力の育成効果を期待して設定した。①において,進路資料を作成するために活動班を構成し,各班が自主的に調査・探究する時間を山崎(2018)の方法に沿って実施し,各活動班の活動内容や調査方法については授業者と単元目標を基に決定した。(表2参照)

「表2 活動班の活動内容や調査方法」

活動班	活動内容	調査方法
職業調査班 (3人)	職業選択に役立つ進路資料作成	13歳のハローワーク, インターネット
高校調査班 (4人)	高校選択に役立つ進路資料作成	高校のパンフレット, インターネット
地元の偉人調査班 (3人)	偉人の生き方から自身の生き方について考えられる資料作成	地元の偉人資料, インターネット
学校PR動画作成班 (4人)	学校や自分自身のことをわかり, 外部にアピールできる資料作成	インターネット

また, 山崎(2018)は3時間分の同じ構成員での班活動の結果のみの分析であったため, 本研究では, 6~8時間目, 10~11時間目と班の構成員を変え, 班活動の妥当性を調査する。それぞれの班のリーダーは班を変えずにそれぞれの班活動を続け, リーダー以外の班員は生徒同士で話し合い, 6~8時間目の3時間分の班, 10~11時間目の2時間分の班を自由に構成することとした。

3. 3. 2 単元計画

単元は山崎(2018)により12時間で構成されている。時限ごとの授業内容は表3の通りである。本研究では, 6時間目から12時間目を調査の対象とした。

「表3 単元計画」

時	活動内容
1	履歴書の作成(1回目)
2~4	それぞれの班で探求・調査活動
5	進捗状況報告・共有
6~8	それぞれの班で探求・調査活動
9	進捗状況報告・共有
10~11	それぞれの班で探求・調査活動
12	履歴書の作成(2回目)

また, 6~8時間目, 10~11時間目にあたる「それぞれのグループでの調査・探究活動」は西川(2016)の『週イチでできる! アクティブ・ラーニングの始め方』に基づいて設定した⁹⁾。

具体的には, 「全体での課題の確認(約5分)」, 「課題達成に向けた学習活動(約40分)」, 「全体での振り返り(約5分)」である。以上のように生徒が主体的に判断し, 自由な相互行為の場を保障する時間が授業時間の大部分を占めている。

3. 4 調査方法

3. 4. 1 キャリアに関するアンケートの実施

生徒へキャリア教育に関するアンケートを実施し, 生徒のキャリア意識の変容を調査する。

アンケートは山崎(2018)に準拠し, 中央審議会(2011)が社会的・職業的自立に向け, 必要な基盤となる能力や態度として挙げている, 基礎的・汎用的能力に関する内容のものとした。基礎的・汎用的能力は「仕事に就くこと」に焦点を当て, 実際の行動として表れるという観点から, 「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理されている¹⁰⁾。この4つの能力を因子として作成された高知県教育センターの「キャリア形成に関するアンケート」, 厚生労働省のキャリアプランニングシートに準拠し, 作成した^{11), 12)}。アンケート項目は表4の通りである。

「表4 アンケート項目」

- | |
|---|
| <p>①私は自分の住んでいる地域が好きである。</p> <p>②地域の活動(季節の行事や地域の掃除など)に参加している。</p> <p>③人の役に立つ人間になりたいと思う。</p> <p>④学校の授業で学んだことは, 将来, 仕事や生活で役に立つと思う。</p> |
|---|

- ⑤自分にはよいところがあると思う。
 ⑥失敗をしても、もう一度挑戦している。
 ⑦失敗した際には、なぜ失敗したのか、ふりかえるようにしている。
 ⑧わからないことや知りたいことがあるとき、進んで調べたり、誰かに質問したりしている。
 ⑨難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している。
 ⑩身近な人や、さまざまな分野で活躍している人の姿から学ぼうとしている。
 ⑪わからないところや知りたいことがあるとき、どのように調べるとよいか理解している。
 ⑫将来の夢や目標を持っている。
 ⑬高校生になって積極的に取り組んでみたいことがある。
 ⑭自分はどんなことが得意であるか知っている。
 ⑮みんなが集まる場所では、他の人のことを考えて行動している。
 ⑯私は人のために力を尽くしたい。
 ⑰今、社会で起きている職業や仕事の変化がおおまかに分かっている。
 ⑱高校や学科等の種類や特徴、職業に就くのに必要な資格等がおおまかにわかっている。
 ⑲将来、中学校卒業時に進む進路についての情報を、色々なものを使って調べてり、集めたりしている。
 ⑳あなたの将来の夢はなんですか。
 ㉑夢の実現に向けて頑張ろうと思っていることはなんですか。

①～⑱は「あてはまる」、「どちらかというにあてはまる」、「どちらかというにあてはまらない」、「あてはまらない」の4件法で、⑳、㉑は自由記述で回答を得た。

3. 4. 2 生徒の会話の記録

ICレコーダーで授業中の生徒の発話及び会話を録音し、生徒の様子をビデオカメラで記録する。

3. 4. 3 履歴書の記述

1時間目と12時間目に履歴書を作成し、記述内容を比較する。履歴書には「学歴・職歴に関する項目」、「免許・資格に関する項目」、「特技に関する項目」、「長所・短所に関する項目」、「自己PRに関する項目」、「中学校PRに関する項目」、「職業希望に関する項目」等を設けた。(図1参照)

「図1 履歴書」

3. 5 分析方法

3. 5. 1 分析1

表4に示したアンケート項目①～⑱の「あてはまる」、「どちらかというにあてはまる」、「どちらかというにあてはまらない」、「あてはまらない」の回答をそれぞれ4点、3点、2点、1点と得点化し、合計点を算出し、3回分のアンケート結果と比較する。点数が高いほどキャリア意識が高いと定義する。

3. 5. 2 分析2

山崎(2018)に準拠し、キャリア教育の授業の生徒同士の会話において「生徒が自分自身の将来や生き方について考えたと思われる会話」の数をそれぞれの活動グループごとで算出し、どの活動グループが自らの将来や生き方を考え、会話を行っていたかを量的に明らかにする。また「生徒が自分自身の将来や生き方について考えたと思われる会話」の例は以下に示す。

「表5 「生徒が自分自身の将来や生き方について考えたと思われる会話」の例」

SK1	：でもこちらへんでき、どこの学校とか、あの大学とか。
KM1	：かかるでしょ。調べるのに時間が。んな(時間)なくねー。
SK2	：どこ学校行くか決まるからさ。その自分でやりたい職業とかさ、J市でできなければさ、別な学校行くしかないし。

また会話計測の妥当性を示すため、(Ericsson & Simon 1984)の基準¹³⁾で分析した。(Ericsson & Simon 1984)の基準は、表6の通りである。

「表6 (Ericsson & Simon 1984)の基準」

①	分類単位や分類方法を定義する。
②	2名以上の分析者がその定義に従って分析する。
③	分類者達の分類結果を突き合わせて、それらの8割以上一致していれば、それを正しい分析が行われたものと判断する。

本研究では、「生徒が自分自身の将来や生き方について考えたと思われる会話」か、そうでない会話かで分類を定義し、共同研究者6人がその定義に沿って分類した。その結果、一致率は83.3%であった。よって(Ericsson & Simon 1984)の基準を満たしている。

3. 5. 3 分析3

単元の1時間目と12時間目で作成した履歴書の記述内容を比較し、生徒のキャリア観の変容を質的に調査し考察する。

4 結果及び考察

4. 1 分析1 アンケート調査結果

1名、3回目のアンケートの回答が得られなかったため、13人の結果を分析する。

クラスのアンケートの合計点は表6のように上昇した。アンケートの得点数をカイ2乗検定にかけたところ、今回のアンケートの得点数は有意水準5%で1回目よりも得点が高かったことから、生徒のキャリア意識が高まっていると言える。

「表7 クラスのアンケート合計点」

山崎(2018)1回目のアンケート得点合計点	山崎(2018)2回目のアンケート得点合計点	本研究アンケート得点
740	863	871

また、個人の得点数の推移については、表8の通りである。

「表8 個人のアンケートの得点数」

	山崎(2018)1回目のアンケート得点	山崎(2018)2回目のアンケート得点	本研究アンケート得点
ST	56	59	53
KM	56	64	63
SK	60	63	67
MR	71	76	75
WM	62	68	76
HS	61	65	62
YA1	69	68	70
SS	66	64	66
KI	70	73	72

YM	58	72	
IR	49	64	66
KR	58	61	68
YA2	53	59	60
YN	74	76	76

今回のアンケートでは5名の得点が減少し、7名の得点が上昇した。山崎(2018)の2回目のアンケート得点は有意水準5%未満で1回目のアンケート得点より高くなったが、本研究で行った3回目のアンケート得点も1回目の得点より有意水準5%未満で優位に高く、2回目と比べても有意差は出ないものの全体の得点数では上回っていることから、生徒のキャリア観は本キャリア教育の授業により高まったと言える。

4. 2 分析2 プロトコル分析結果

キャリア教育の授業の生徒同士の会話において、「生徒が自分自身の将来や生き方について考えたと思われる会話」の数を計測した結果を表9に示す。

「表9 生徒が自分自身の将来や生き方について考えたと思われる会話数」

	職業調査班	高校調査班	地域の偉人調査班	学校PR動画作成班
6時間目	0	0	0	0
8時間目	8	2	0	0
10時間目	0	0	2	0
11時間目	0	0	1	0
12時間目	7	12	2	33

12時間目には、今まで発話がなかった班も発話が多く見られた。これは、12時間目は履歴書の作成の時間であることが関係していると考えられる。また、「地域の偉人調査班」や「学校PR動画作成班」は、12時間目まではキャリア観に関する発話がなかった。これは、班での調査活動の内容が、自分の生き方に関して結び付けられず、履歴書の作成段階になって就職や進学に関して教師や友達に相談した結果に表れていると考えられる。

「表10 職業調べ班の活動中の会話（8時間目）」

MR	：俺弁護士か公務員になりたいね。
HS	：私、公務員。
SS	：俺も公務員
HS	：給料安定しているし。だけどブラックらしいよ？

職業について調査する調査活動の中で希望する職業、その職業の収入や内容に関して気付いている様子が分かる。

「表11 学校PR動画作成班の活動中の会話（12時間目）」

KR	：ねーまじでさ、職業何が良いと思う？
YA1	：ねーIRさ、スポーツインストラクターになれば良いと思う。
KR	：あっ俺も！俺もスポーツティーチャーと一緒になろう。
WM	：じゃあIRくんと一緒にルームシェア。
ST	：ルームシェア（笑い）
YA1	：KRは無理だよー、だってさ、自分もさ、競技一緒にしたくなっちゃってさ、その人と一緒にやっちゃうでしょ。

調査活動の中で対話を通して職業における適正について考えている。他の時限では「生徒が自分自身の将来や生き方について考えたと思われる会話」が見られなかった学校PR班も、「履歴書作成」によって生徒が自分自身の将来や生き方について考えたことが分かる。

4. 3 分析3 履歴書の比較結果

履歴書の記述をキャリア教育の授業の前後で比較し、アンケートの同項目の結果と照らし合わせて分析を行った。1名、2回目の履歴書の作成ができなかったため、13名分の1回目、2回目の履歴書の記述から考察した。

4. 3. 1 「学歴・職歴」に関する記述

履歴書の「学歴・職歴」に関する項目では、表11の通り、11月時点では、13人中13人が中学校卒業段階までの記述だったが、キャリア教育の授業実施後は13人中10人が就職段階まで記述することができた。

「表12 「学歴・職歴」に関する記述の変化」

	授業前	授業後
中学卒業まで	13	0
高校卒業まで	0	0
大学・専門学校まで	0	0
就職まで	0	13

このことから、キャリア教育の授業を通して将来の就職先まで思考をめぐらし、就職段階まで記述をすることができたと考えられる。

4. 3. 2 「免許・資格」に関する記述

「免許・資格」に関する項目は、13人中12人の記述量が増加した。図2はその一例である。

年	月	免許・資格
2018	4	日本語能力検定2級
2018	11	日本語能力検定4級
2018		運転免許
		将来の資格

免許・資格に関する特許事項 (免許にまつた経緯、取得予定の資格など)

「図2 「免許・資格」に関する事項の記述例」

図2を記述した生徒は、キャリア教育の授業の実施前に履歴書を作成した際は、「免許・資格」の欄は空白であった。

このことから、調査活動で高校入試において加点対象となる資格を知り、生徒同士の対話を通して自身の学力を考慮しながら資格獲得の時期を考えたのではないかと考えられる。

また、希望する職業に必要な資格についても知ることができることが分かる。

この結果は、アンケート「⑩高校や学科等の種類や特徴、職業に就くのに必要な資格等がおおまかにわかっている。」の点数の上昇結果とも一致している。(表13参照)

「表13 「高校や学科等の種類や特徴、職業に就くのに必要な資格等がおおまかにわかっている。」の合計得点数」

山崎 (2018) による2回目	本研究による3回目
41	44

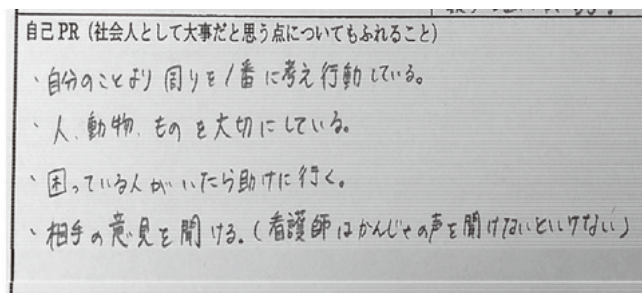
4. 3. 3 「自己PR」に関する記述

「自己PR」に関する記述は、13人中13人全員が増加した。図3、図4はその一例である。

自己PR (社会人として大事だと思う点についてもふれること)

- ・自分のもも考えるけれど、一番は周りの人への考え行動している。
- ・周りの人を大切にしている。
- ・困っている人がいたら、積極的に助けていた。

「図3 生徒YNのキャリア教育の授業実施前の記述」



「図4 生徒YNのキャリア教育の授業実施後の記述」

授業実施前の記述に加え、「人、動物、ものを大切にしている。」「相手の意見を聞ける」という記述が増えている。これは、「看護師はかんじやの声を聞けないといけないうい」という記述があるように、生徒の相互行為を保証した班活動や会話を通して、看護師に必要な資質を意識していくようになり、記述が変容したと考えられる。

しかし、アンケートの同内容の項目である「⑤自分にはよいところがあると思う」の点数には減少が見られた。(表14参照)

「表14 『自分にはよいところがあると思う。』の合計得点数」

山崎 (2018) による 2 回目	本研究による 3 回目
42	40

4. 3. 4 「就きたい職業」に関する記述

「就きたい職業」に関する記述は13人中9人の記述量が増加した。しかし、記述量に変化のなかった生徒は、一回目の履歴書の作成時点で既に記述があったことから、生徒の職業に関する意識は全体的に高まっていると考えられる。

また、この結果は、アンケート項目⑫の「将来の夢や目標を持っている。」の得点数の上昇とも一致している。

「表15 『将来の夢や目標を持っている。』の合計得点数」

山崎 (2018) による 2 回目	本研究による 3 回目
44	48

5 結論

生徒の自由な相互行為の場が保証された授業を実践することで、生徒のキャリア意識は、課題の解決に向かった調査・探究活動や対話を通して、高まることが明らかとなった。

また、「職業」に関する教材を扱い、「資格」を中心に探究すると、生徒は「資格」を中心に探究・調査し、対話をしていく中で、就職の難しさや、就職のための進学について考え、現在自分が何をすればよいかというところまで具体的に考えを巡らすことができるということが明らかとなった。特に、「履歴書の作成」は、生徒のキャリア意識の向上に有効であることが明らかになった。

6 今後の課題

履歴書作成に関して、本来の履歴書の形式に沿うことを意識し作成したことで、資格や希望の職業について名称を書くのみとなってしまい、その内容について詳しく書かせることができなかった。また、3回目のアンケートにおいて、2回目のアンケートより得点が減少した生徒の要因を調査すると共に班の構成やその構成方法、調査探究活動の内容など、授業の内容をさらに検討していく必要がある。

参考文献・引用文献

- 1) 中央教育審議会：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」, p.16, 2011.
- 2) 中央教育審議会：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」, p.39, 2011.
- 3) 中央教育審議会：「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」, pp.55-56, 2016.
- 4) 前掲載3).
- 5) 望月厚志：「現代社会における『職業指導』及び『キャリア教育』の今後の課題と新たな方策－小学校・中学校・高等学校における『職業指導』・『キャリア教育』の一貫性のある新たな展開を目指して」, 茨城大学教育学部紀要(教育科学), vol.66, p.622 茨城大学, 2017.
- 6) 山口郁雄：「アクティブ・ラーニングとキャリア教育に関する調査・研究」, 佐賀女子短期大学研究紀要, vol.50, pp.127-143, 佐賀女子短期大学, 2016.
- 7) 松下慶太・高瀬浩之：「タブレット端末を活用したキャリア教育実践－社会人へのインタビュー映像制作ワークショップを通して－」, デジタル教科書研究, vol.3, No.24, pp.24-40, デジタル教科書学会, 2016.
- 8) 山崎大樹・渡部智華・小林篤史・西川純：「中学生のキャリアへの考えの変容に関する事例的研究－キャリア教育の授業実践において－」, 第16回臨床教科教育学セミナー発表要項, p.79, 臨床教科教育学会, 2018.
- 9) 西川純：「週イチでできる！アクティブ・ラーニングの始め方」, pp.38-40, 株式会社東洋館出版社, 2016.
- 10) 中央教育審議会：「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」, pp.23-26, 2011.
- 11) 高知県教育センター：「キャリア形成に関するアンケート(中学校版)」, 2014年(平成31年1月29日閲覧)
<http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/files/2014061600084/3.pdf>
- 12) 厚生労働省：「キャリアプランニングシート」, 2012年(平成31年1月29日閲覧)
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/nouryoku/kyarikon/dl/2012text.pdf>
- 13) Ericsson, K. A. & Simon, H.A: Protocol Analysis Verbal Reports as Data, MIT Press, 1984.

A Case Study of Junior High School Students' Changing Career Views Based on Mutual Action

Atsushi KOBAYASHI* · Nanako SEKIDO** · Yusuke AKAZAWA*** · Kuon TAKEMOTO***
Kenichiro FUKUI*** · Kohdai FUKUSAKA*** · Jun NISHIKAWA****

ABSTRACT

In this research, we sought to conduct career education class practice that guaranteed first grade junior high school students free interaction during comprehensive learning time in order to verify the effectiveness of this learning method. The results reveal that students expanded their career views by studying and exploring at their own discretion and by engaging with other students in the same activity group. In particular, it was revealed that “preparation of resume” is an effective way for students to improve their career awareness.

* Ogaki City Nishi Elementary School ** Nagano City Kohoku Junior High School *** Professional Degree Program
**** School Education